新科目「大学史」とシンポジウム「世界と日本の大学史の流れの中での東亜同文書院と愛知大学」について

佃 隆一郎
〈大学史事務室〉

科目「大学史」の開設

1990年代の中ごろから、総合大学を中心とした各大学において「大学史」を講義科目に組み入れる動きがさかんになりはじめている。これは、大学設置基準の大綱化（1991年）によって各大学が特色ある個性的なカリキュラム、新科目を創り出すことが求められるようになってきたことをうけて、大学という教育機関を歴史の客体として捉えようとする気運が高まってきたことの表れといえよう。すなわち、戦後も半世紀を過ぎ、現代史というものが形になってきつつある中で、その一面として自らの大学（さらには大学全体）の歴史を見てみることが、今日の「歴史」を見て考える入口のひとつになるのではという問題提起が生まれはじめたということであるが、その一背景として多くの大学が「50周年」「100周年」といった大きな節目を迎え、年史や記念誌・写真集などの関連出版物・刊行物が、「歴史的記録」として続々と作製されていることがあることは言うまでもなかろう。

こうした中、本愛知大学でも創立50周年以後、1998年の大学史展示室新設、2000年の『愛知大学五十年史 通史編』刊行を契機として、本学の歴史をより広く、一般の学生や地元の人々に知ってもらうことの必要性が感じられはじめたのであり、創立60周年にあたった2006年、3月に普及版の『愛知大学小史 六十年の歩み』が梓出版社より刊行されたのに続き、9月には同書をテキストにしたリレー講義「総合科目1（大学史）」が、まずは名古屋（三好）校舎で新たに開講されたのである（同書の出版および同科目の新設についての詳細は、当時中心的役割を担った海老澤善一教授――当時副学長――が本編で後述）。

科目「大学史」初年度の経過と結果

諸事情により名古屋校舎のみでの開講となったが、初年度の「大学史」リレー講義は、2006年度秋学期（後期）の金曜3時限目に設定し、06年9月22日から07年1月26日まで、試験を含め計14回行なった。

担当者は、北嶋繁雄名誉教授・海老澤善一前副学長・太田明教授・大島隆雄名誉教授・小崎昌業氏（卒業生）・豊島忠氏（同）・山田義郎氏（同）・武田信照学長に「コーディネーター」としての佃である（各担当テーマは後述。北嶋氏と卒業生3氏はゲストとして招聘した関係で、佃と共同の形で講義を行なった）。

シラバスで打ち出し、学生に伝えた「授業のテーマ・目標」を、学内冊子『開講科目の紹介』から以下引用する。

> 諸君が入ってきている“大学”とはどのようなところだろうか。大学の意味や、その社会的な存在意義を知るためには、大学全体の歴史を知るのが近道である。教育機関の中で最古の歴史を持っている“特殊な学校”である大学について、まず大学の起源と西洋での大学の歴史を

考えよう。次に日本の近代化の過程の中で、大学が設立されるまでの経緯とその役割を理解しよう。本愛知大学は敗戦直後の1946年に創設されたが、それから60年、この大学にも様々な出来事や変革があった。その歴史を実際の体験談も交じえ、具体的に見ていくことにしよう。

この講義は、諸君が所属しているこの大学の生きた歴史と現状での課題、それから将来への展望を理解してもらい、さらにはそこから日本や世界の大学全体の歴史にもまた目を向けることで、大学生活の意義を再発見してもらうためのものである。

（名古屋・車道校舎の「共通教育科目・教職課程版」778頁）

このように本講義は、日本、さらには世界全体の大学の歩みとしての「大学史」と、自らの大学のみ対象の「大学史」とを包含した形で試みたものであり、範囲やバランスの調整が第一の課題になった（先行の他大学の中には、両タイプをすでに別々の科目としているところもある）が、事実上のコーディネーターとなった私としては、「2部構成」の講義であることを学生に理解してもらうよう努めた所存である。

受講生の構成としては、新編カリキュラムでの科目であることから1年次生のみで、かつ時間が必修科目と重複した学部があったことから経営学部生がほとんどとなったが、人数の面では137名と、比較的多数を集めることができた（学部別内訳は、経営学部132、法学部4、現代中国学部1名。出席は取らなかったが、全体的に半数ほど参加）。しかし、「大学史」という科目の性格上、特定の学部に受講生が偏ることは好ましくないことは当然であり、次年度以降の時間割編成上の考慮もまた課題となった。講義中の雰囲気にしても、私語がかなり多かったことは否めず、（教室を再三にわたって変更するなど、混乱を与えた面が確かにあったにせよ）受講生にいち早く興味と関心をひきつけることができたかという点には、問題を残したと言わざるをえない。

しかし後半の「愛知大学の歴史」で、OBを講師に招いて講義した「愛知大学事件」および「薬師岳遭難事故」については、（少なくとも試験の段階で）関心を寄せて考えてくれた受講生が多いことがうかがえ、これからさらに愛知大学で学生生活を送っていく彼・彼女らに、この場でこれら「ドラマ」を知らせることができたことは意義があったと信じたい（試験時の反応についての詳細は、本編に後掲する拙文で記述）。

シンポジウム「世界と日本の大学史の流れの中での東亜同文書院と愛知大学」について

「大学史」講義がスタートした一方で、（本誌冒頭で藤田教授・大島名誉教授が述べているように）「愛知大学・東亜同文書院大学記念センターの情報公開と東亜同文書院をめぐる総合的研究の推進プロジェクト」が文部科学省の私立大学学術高度化推進事業に選定されたことを受け、東亜同文書院大学記念センターのもとで愛知大学史研究が本格的に再開されることになった。

「大学史」講義の各担当者には、このプロジェクトに関わっている人とそうでない人がいて、両者は今後もとりあえず別々の形で進められることになるが、講義担当者でもある大島氏の発案により、講義担当者グループと東亜同文書院大学記念センターとが共催する形での公開シンポジウム「世界と日本の大学史の流れの中での東亜同文書院と愛知大学――初の『大学史』講義を終えて――」が実現することになり、2007年3月10日(土)の午後1時より、愛知大学豊橋校舎研究館1階の第1・2会議室にて開催された。副題が示す通り、初めての試みであった「大学史」講義の報告会としてのものである。

予定した報告テーマ・報告者（すなわち講義の担当テーマ・担当者に相当）は、順に以下の通りである（報告者はカッコ書き、敬称・肩書略）。

中世ヨーロッパにおける大学の起源（北嶋）

欧米における近代大学の誕生（海老澤）

日本における大学の形成（太田）
旧制大学の歩み（大島）
東亜同文書院の歩み（小崎）
愛知大学の創設の経緯（小崎）
戦後の学制改革（太田）
「愛大事件」とは何か（豊島）
薬師岳での山岳部遭難事故（山田）
法経学部分離と三好移転（武田）
教育組織の改革（武田）
愛知大学60年の歩み――まとめとして――（佃）

このうち海老澤・武田の両氏が所用のため欠席したので、実際は7名が9つのテーマを報告する形になった。各報告者の使用レジュメは講義時のものでも、新たに手直し・作製したものでも可としたが、報告時間はいずれも20分を目安とした（ただし、テーマが2つの太田・小崎の両氏には、合わせて20分でお願いした）。報告の司会は佃が担当し、休憩後の討論の司会は大島氏が担当した。参加者（入場無料）は全体を通じて約50人となり、これは予想を超えるものとなった。また、学内の教職員のみならず、卒業生や学外の方の姿も見られた。予定時間を若干超過する形で、午後5時半ごろに終了することになった。

『愛知大学史研究』掲載にあたって

今回本『愛知大学史研究』創刊に際し、上記シンポジウムの記録を掲載することにしたことも大島氏の既述の通りであるが、報告の記録としては各担当者の使用レジュメを、本人に原稿化してもらった上で掲載する。シンポに欠席した人にも講義用レジュメの原稿化の理解を得られたことにより、講義での全担当者分をカバーすることができた。それによってシンポ当日の録音原稿は、後半の討論の部分のみ記載することにする。

また、「大学史」リレー講義は2年目の2007年度より豊橋校舎でも開講される運びとなり、春学期は豊橋、秋学期は名古屋校舎で実施されることになった。併せてテーマの見直し及び担当者の一部変更をも行なうことにしたが、本編はあくまで初年度の報告のため、現在進行中の「大学史」講義についてのこれ以上の状況報告は差し控えることにする。

いっぽう、「（東亜同文書院を含めた）愛知大学の歴史」に関する新たな伝達活動として、講義や『愛知大学小史』のほかにも写真パネル展開催や展示室改装、創設期の人物の伝記作製などの諸事業が、創立60周年を機に進められているところであり、講義にしてもそれらとの連関が求められているところであるが、ここでは講義に対象を絞ることとし、他の諸活動の紹介・報告は別の機会に譲りたい。

以上のことをご了承いただきたいとともに、よりよい「大学史」講義にしていくために、以下の報告への率直なご感想・ご意見を各方面からいただきたい次第である。